

詠嘆表現

— 感動詞・応答詞および主述文・非主述文 —

田中みどり

〔抄録〕

いわゆる感動詞のうち、応答・呼びかけを表わすものは、成立の要件として他者を含むものである。、感動を表わすものは、音韻以前の言語音を含む、叫び声のものもあり、また、感動は自らの内にとどまるものである場合もある。そこで、感動を表わすものを感動詞、呼びかけ・応答を表わすものを応答詞と名付ける。

山田孝雄は、文を【述体】と【喚体】の二類に分けた。喚体は、体言を骨子とした、直感的な表現で、感動・希望を表わす。

述体・喚体の概念に、言語の話される場面や文脈の要素を加え、また、一語から成る文に等価な和歌などの創作表現や「翔ぶが如くに 都へもがな」のような希望表現なども考慮した結果、主述を含んだ文を主述文と名付け、主述関係を含まない文を非主述文と名付ける。

キーワード 詠嘆表現、感動詞、応答詞、主述文、非主述文

1 音声言語と文法

音韻・語彙・文法は、同じ言語の間でも、地域や世代など、さまざまな要因によってずれがあるが、多くの言語では共通語が一定の体系を保持している。日本の標準語政策はフランスのように確立しなかったのであるが、日本語は言語体系の異なった言語と接触する機会が少ないため、共通語の範囲で一応のコミュニケーションが成り立っているのが現状である。

フランス語は、外交語、社交語として、長い時間をかけて洗練されてきた言語で、標準語はその結実である。一方で、フランスは、さまざまな民族を擁していること、他国と国境を接していること、かつての植民地の人々の往来があること、など、日本の事情とは異なった事情を有しているから、他の言語が流入する可能性は大きい。現在のフランスが標準語を護ろうとする意識には、そのような、さまざまな要因も関連している。

標準語は、書記言語が確立していることを、一つの要件とするものである。しかしながら、

言語は、まず、音声言語として存在する。音声言語は、ためらい音や、言い間違いなどを含み、時には、主述関係がねじれて文意を為さない場合もある、という体のものである。そこで、これまで、音声言語は音声学や方言学の中で研究されるにとどまり、文法学では顧みられることの少ないものであったのであるが、書記言語の中でも、会話文は音声言語を写したものであり、また、詩歌は歌うものであるから、音声を離れては存在しない。従来顧みられることの少なかつた音声言語をも顧慮した、言語の研究が必要なのではないだろうか。⁽¹⁾

1・1 音声・音韻、語彙、文法と人間の抽象能力

人間は、音声によってさまざまなものを表現する。「あ」という一音の音声も、喜びや悲しみの感情表現にもなり、何かに気づいた時に発する声や返答になることもできる。危険に気づいて発した「あ」という声が、他者に危険を伝える警告になることもある。その時の気持ちや伝えたい内容が音声に込められることと、その場の状況によって、「あ」は、意味のある表現となることができる。

一つの音は、長短・高低・強弱によって、別の意味を生じる。

音の数が増えれば、より多くの意味を表わすことができ、その組合せによって、より一層の意味を表わすことができる。

音声は、同一人が発音しても、発音するたびに音が異なり、人によっても異なる。その異なった音声を、抽象的な一つの音として理解する能力は、「あ」を喜びの声であると理解したり悲しみの声であると理解したり警告の声であると理解したりする能力と同じである。その抽象的な音が、音韻である。音韻は、共同体によって異なる。

音韻の組み合わせ方によって語彙ができ、語の組み合わせ方によって文法ができる。

語彙や文法もやはり、抽象的なものである。今日の喜びは、明日の喜びと同じではない。私の喜びは他者の喜びと同じではない。それらを「喜び」という言葉でまとめることができる能力、「私はうれしい。」という表現から「私は悲しい。」という表現を生み出すことのできる能力は、〈抽象化〉に由来する。

1・2 概念とカテゴリー

動物が生きていく時、まず、食糧になるものと食糧にならないものとの区別が必要である。安全な場所と安全でない場所との見分けも必要である。ダンスや鳴き声などによって食料になる物や危険を知らせている動物たちは、少なくとも、それらについての概念をもち、カテゴリー化能力、そして判断能力をもっている。

動物がどのように鳴き声を使い分けるのかは、まだ、十分に解明されていない。しかし、食糧のあることや、危険であることなどを、ダンスや鳴き声などによって仲間に伝えている動物

たちのあることは、人間の言語を考える上に大きな示唆を与えてくれる。

近代言語学の潮流の一つに、モノに名前をつけること〈命名〉を、言語の基礎に置く考え方があった。「花」「山」などと、名前を付けることは、それを他のものと識別することであるからである。しかしながら、動物たちが、食糧のあることや危険であることなどを仲間に知らせているように、概念やカテゴリー化は、名詞的なものにとどまるものではない。動詞的なもの、状態的なもの、を表わす言葉も、名詞的なものと同時に発生したであろう。

言葉は、初めは、〈1・1〉に述べた「あ」のような、一音の語であったであろう。それがいろいろの意味を担い、また、他の音と組み合わせられて、さまざまな語ができていったのであった。

基本の語は、〈感動を表わす言葉〉〈モノの名を表わす言葉〉〈動作を表わす言葉〉〈作用を表わす言葉〉〈状態を表わす言葉〉である。

1・3 感動詞と応答詞

危険がせまった時に、われ知らず発する声は、叫び声であるから、音韻の範疇では表わしきれない音を含む。うれしい時、悲しい時も同じである。

それらは、われ知らず発する声であるから、いまだ言語音とは言えない部分もある。従来は、「わー」「ぎゃー」「むー」「うーむ」……などと、類型化して表記してきたものであるが、近年、音に近づけて「えー」のような表記をする人も現れた。叫び声は、このように、一般の言語音からはずれた部分をもっている。

しかし、叫び声は、ある感情がもとになって出た音であって、その感情を心のうちに受け止めて発するものと一続きのものである。そこで、くしゃみや咳などの音とは別にして、言語音に含める。

「あ」の一語が、他者に危険を伝える警告になることもあるように、何らかの音声を発することで他者の注意をひき、他者に呼びかける言葉になることができる。イントネーションを下げて「あー」と言えば肯定を、イントネーションを上げて「あー？」と言えば疑問を表わす。「はー」「えー」など、それぞれの表現の内容には、習慣的な意義の違いがある。

習慣的な意義の違いがある、ということは、すでに言葉としての資格を得ているということにはほかならない。ただ、感動を表わす言葉や呼びかけを表わす言葉、応答を表わす言葉の類は、異なった言語に於いても、似た形である場合が多い。また、疑問や質問を表わすのにイントネーションを上げる形式のあることも、似ているものの一つである。

感動を表わす言葉と呼びかけを表わす言葉と応答を表わす言葉とは、いずれも、それだけで

独立して使われる語である。そのため、日本語文法では、一般に、感動詞として一つにくくられる。

呼びかけを表わす言葉と応答を表わす言葉には、感動を表わす言葉から分かれたものがある。また、感動を表わす言葉から分かれたものではないものであっても、呼びかけの言葉や応答を表わす言葉に、感動が込められることもある。それ故、感動を表わす言葉に、呼びかけの言葉や応答を表わす言葉も含めて、感動詞という名称で呼ぶことは、まったく見当違いというわけではない。

しかし、呼びかけを表わす言葉や応答を表わす言葉は、他者との会話の中で用いられるものである。成立の要件として他者を含む、という点で、これらは、敬語や、自発・可能・受身・使役・尊敬の助動詞と同じ性格をもっている。また、日本語の人称代名詞は、話す相手や場面によって異なった語を用いる。これも、成立の要件として他者を含むものである。それに対して、感動を表わす言葉の中には、音韻以前の言語音を含む、叫び声のものもある。また、感動は自らの内にとどまるものである場合もある。

上にも述べたように、呼びかけの言葉や応答の言葉に、感動が込められることもある。しかし、われ知らず発する叫び声の「わー」と、肯定・否定の「はい」「いいえ」とでは、意識のあり方が、まったく正反対である。これらを一つにくくるのであるならば、同じ感動詞という呼称で呼ぶよりは、独立語といった呼称の方がまだしも誤解が少ない。

そこで、感動を表わすものを感動詞、呼びかけ・応答を表わすものを応答詞、と名付ける。呼びかけの言葉や応答の言葉に感動が込められるものは、応答詞の詠嘆表現である。

1・4 一語で文を形成するもの

一音の「あ」が、喜びを表わしたり、悲しみを表わしたり、さまざまな意味を表わし得るものであるように、語も、場面によってさまざまな意味を表わし得る。

「花」は、ものの名前であることもある。また、「花が咲いていること」に気づいて発する感嘆の言葉であることもあり、一語で文を形成して「花が咲いている。」ということのを他者に気づかせる時に発する言葉にもなる。この場合には、感嘆符を付して、「花！」と表記することができる。

他者に報知する場合のものは、「花花！」と、二つ重ねて言うことが多い。これは、「はいはい。」「うんうん。」「そうそう。」「違う違う。」「こっちだこっちだ。」「鉛筆鉛筆（私が欲しいのは、本ではなく。）」などと同じである。応答を表わす「はいはい。」「うんうん。」の場合には、「はい。」「うん。」と言うより軽い表現になる。投げやりな感情の込められることもある。確認を表わす「そうそう。」「違う違う。」の場合には、軽い表現になる場合と強調の場合とある。その他の「こっちだこっちだ。」「鉛筆鉛筆。」の場合には、ふたつ重ねることで、そのものを明確に指し示す。「早く早く。」という気持ちや、いらいらした気持ちが込められることもある。

というように、この二つ重ねる形は、言葉によって、あるいは場合によって、二つ重ねることの意味が異なる。どのような意味であるかは、言語の話される場面や語調から読み取る。

「花。」はまた、「(この葉の陰にある、実のようなもの、) これは何ですか?」という質問に対する答えとして発される場合もある。「それは花だ。」の意である。言語の話される場面に即応して「花。」と言うのであるから、その意味は聞き手に了解される。「花。」を強調して言うならば、これも「花!」と表記することができる。会話の、

—— おいしい?

—— おいしい。

のような文も、これと同じである。

これだけで、十分に言語は成り立っている。むしろ、言語は、このような形のものに始まって、しだいに文意の明確な形を生み、さらに、複雑な文を生じていったものではないだろうか。

概念を認識できること、カテゴリー化能力のあること、判断力のあることと、言語が形を成すこととは、かならずしも同時ではない。サルやイヌなどの動物は、相当の判断力をもっているが、そのコミュニケーションの具の一つである鳴き声は、人間の言語ほどに細分化したものではなさそうである。それでも、一定の鳴き声の形式によって、他者に或ることを告げている。「花。」「おいしい?」「おいしい。」などの意味を表わす鳴き声の形式はあるであろう。人間の言語も、そのように大まかな、しかし、生きていく上でもっとも重要なことがらについての表現から、始まったものであろう、と考えるからである。

これを、不完備な文、省略形など言うのは、言語が複雑に分節化したのちの目から見たものである。

言葉には、

- (1) 人間は言葉によってものごとを認識・識別し、分析・判断し、比較・総合し、認識・思考する。
- (2) また、それを用いて、ものごとを伝達したり、対話をしてよりよい考えをさがしたり、挨拶・会話をして心の交流をしたりする。
- (3) さらに、願望と決意、反省と自覚の念から、神に祈る。

などの役割がある。

人間の言語は、音声器官の発達と関係の深いものである。言語が音として発されることから考えて、他者とのコミュニケーションが大きなウエイトを占めていることは確かである。

他者とのコミュニケーションのための言語は、まず、話し言葉として成立するものである。書き言葉が発達すると、話し言葉と書き言葉とは、やや異なった形をもつようになる。やがて、話し言葉の中に、書き言葉の要素が混じるようになる。改まった場面での言葉ほど、その傾向が強くなる。また、標準語には、書き言葉の要素が入っている。

1・5 文の形

言葉は、人間のさまざまな営みに即したものである。

事実説明

一人称の情意を述べるもの

一人称の意思・希望を述べるもの

一人称の判断を述べるもの(肯定・否定・推量・疑問)

二人称に対する質問・勧誘・命令を述べるもの

などがある。

日本語の話し言葉においては、主語の一人称・二人称を表わす言葉を表わさないことが多く、それを表わすのは、取立てや強調であることが多い。

疑問の表現は、肯定文の文末を上げてイントネーションで示す場合もあるが、疑問を表わす助詞を用いることもある。「イツ、ドコ、ダレ、ナニ…」などの疑問の語が用いられる場合もある。

否定は、「ズ、ナイ…」などの否定を表わす語を加えて表現する。英語などにある、

I met nobody on the road.

のような表現は、日本語にはない。この場合には、「会わなかった」のように用言を否定する形を取る。

時制やアスペクトは、英語などでは、過去形や be・will・have などを用いた特定の形によって表現する。日本語では、文末にそれを示す語を加えて表現する。推量なども同じである。

一人称の推量の文である、

春になったら、鳥が鳴くだろう(と思う)。

の場合、「だろう」に一人称の推量が語られているのであるが、「鳥が鳴く」という句と、連続して表わされる。

〈S-P〉ダロウ。

英語では、このような場合に、“I think”のような句が入る。

古典語では、

鳴かむ

のように、推量を表わす語の「ム」は動詞「鳴ク」と融合した形で行なわれる(地方によっては、現在も「鳴こう。」の形の行なわれている所もある)。山田孝雄が、複語尾と呼んだ所以である。この点、古典語と現代語とは、構文に違いがある。「～したのであった」(完了)、「～ている、～てある」(存続)、「～するのがよい」(当然)、「～することができる」(可能)など、現代の日本語は、分析的な形に移行している。

1・6 詠嘆表現

〈S-P〉を、一人称の判断の語でくくる、日本語のこのような構造は、一人称の情意を述べるものにもある。和歌の詠嘆表現、例えば、

天離る 鄙の長道ゆ 恋ひ来れば 明石の門より 大和島見ゆ

[万葉集三・255]

を現代語訳する際の、「(～デアル) コトヨ、コトダ、コトダヨ」である。

都から遠く離れた片田舎の長い道のりを、都を恋しく思っ上つてくると、明石の海峡から大和の半島が見えることだよ。

和歌は、喜びや悲しみの感情を歌う。感動を表わす助詞の「カ」「モ」「ナ」「ヤ」「ヨ」「ヲ」などが無くとも、そのうちに感動の気持ちがあるため、現代語訳には、「コトヨ」のような語が表わされるのである。

この「コトヨ」は、感嘆文の

きれいなこと！

の「コト」と同じものである。

〈S-P〉を「コト」で包んで、〈S-P〉全体を体言化し、「～ヨ」と詠嘆する。この時、「〈S-P〉コト」は名詞句となって、

松浦川 玉島の浦に 若鮎釣る 妹らを見らむ 人のともしさ

[万葉集五・863]

の場合の、名詞「トモシサ」と同じ資格となる。この、「人のともしさ」のような形は、山田孝雄が、【喚体】と名付けたものである。

山田孝雄は、主述をもつ句を述体と名付け、体言を核に感動・希望を表わすものを喚体と名付けた。以下に、述体・喚体を検討する。

2 述体と喚体

2-1 山田孝雄の【述体】と【喚体】

山田孝雄は、『日本文法學概論』において、

……惟ふに上述の所謂四體の句の根本の形式とするものは、主格と賓格との對立及び述格がそれらの結合をなせる形式の句にして、その主格と賓格との對立及びそれを述格にて結合することは前にもいひたる如く人間の思想の了解作用の必然の現象にして、吾人はその了解作用に於いては必ず先づその主格と賓格とを分離して考へ、さて後これが一致又は差別を識別し述格によりて二者を結合して一の命題となすなり。

[日本文法學概論、宝文館出版、S11発行、S55第八刷、P. 933]

吾人はわが國語にありてはことに感情等をあらはす言語發表にして上述の如く主格述格

の區別を立つる形式によらざるもの存するを見るなり。たとへば、

妙なる笛の音よ。

あっぱれの武者振や。

の如きこれなり。

…… (中略) ……

而してかくの如き句は上述の論理上の命題の形をとれるものとは全く形式と性質を異にせり。これ實に感情の發表の形式にしてかの理性の發表の形式とおのづから領域を異にするものなりとす。

[同、p.934~p.935]

と述べて、日本語の句を述体と喚体の二類に類別した。

喚体は、

一の體言を骨子として、それを呼格とし、それを思想の中心點として構成せらるゝものなり。これはその直感的一元性の發表形式をとることに於いて、述體の句の理性的二元性の發表たるものと性質と構造との二面に於いて根本的に違ふものとして對立するものなり。

[同、p. 936]

というもので、

あはれうるはしき花かな。

みかさの山に出でし月かも。

秋萩をしがらみふせてなくしかの目には見えず音のさやけき。(古今集、秋上)

うつゝにはさもこそあらめ、夢にさへ人目をもるとみるがわびしき。(古今集、戀三)

神ならぬ身のかなしきよ。(保元)

面白のけしきや。

情けなの人や。

などの感動の表現と

あはれしりたる人もがな。

老いず死なずの葉もが。

などの希望の表現とがある、とする。

この感動の表現のうち、「面白のけしきや。」「情けなの人や。」は、いわゆる形容詞の語幹用法である。「面白の」は「けしき」を、「情けなの」は「人」を修飾するから、「あはれうるはしき花かな。」と同じ形である。

秋萩をしがらみふせてなくしかの目には見えず音のさやけき。

うつゝにはさもこそあらめ、夢にさへ人目をもるとみるがわびしき。

は、「神ならぬ身のかなしさよ。」と並べて見れば、「音のさやけさよ」「夢にさへ人目をもると見るがわびしさよ」と解することができ、現代語でも解りやすくなる。「音のさやけさ」「夢にさへ人目をもると見るがわびしさ」のうちに、

あはれうるはしき花かな。

みかきの山に出でし月かも。

の詠嘆の助詞と同じく、詠嘆を含んでいるのである。⁽²⁾

ところで、「神ならぬ身のかなしさよ。」も、「秋萩をしがらみふせてなくしかの目には見えず音のさやけさ。」「うつゝにはさもこそあらめ、夢にさへ人目をもるとみるがわびしさ。」も、喚体の中心となる体言は「かなしさ」「さやけさ」「わびしさ」のように、形容詞出自の名詞である。そこには、

神ならぬ身 (情意を表わす形容詞の対象) — かなし (P)

音 (S) — さやけし (P)

夢にさへ人目をもるとみる (情意を表わす形容詞の対象) — わびし (P)

の関係がある。

情意を表わす形容詞の対象をも〈S〉とする立場もあり、その場合には上記の3例は〈S—P〉関係をもつと単純にいい得るが、主語と情意を表わす形容詞の対象とを含めて、今、これを〈S'—P〉と表記する。

(形容詞には状態を表わすものと情意を表わすものがある。形容詞は、いずれも根底には、「私が思う」を含む。「花 美し。」の「美し」は、花の性質を述べるものでもあり、言語主体の主観であることもある。「山高し。」のように状態を表わすものであっても、「高し」は相対的なものである。「さやけし」の中にも、それを「さやけし」と感じている言語主体の情意は含まれている。それ故、形容詞の主語を表わすものと情意を表わす形容詞の対象を表わすものとが、一続きのものとなる。)

『日本文法學概論』は、これらを「あはれうるはしき花かな。」「みかきの山に出でし月かも。」「面白のけしきや。」などと同列に置いたのであったが、この場合の「ノ」「ガ」は、単純に連体の助詞とは言えない側面を持つ。「かなしさ」「さやけさ」「わびしさ」が、形容詞出自の名詞であることから、述体性を含み、上に述べた〈S'—P〉関係をもってしまう面があるからである。

「音のさやけさ。」「神ならぬ身のかなしさよ。」は、「面白のけしきや。」のように、

※ さやけの 音よ。

※ かなしの 神ならぬ身よ。

となってはじめて、「あはれうるはしき花かな。」「みかきの山に出でし月かも。」「面白のけしきや。」「情けなの人や。」などと同列に置くことができるものである。ただし、「夢にさへ人目

をもるとみるがわびしさ。」は、「夢にさへ人目をもるとみる」の中に主述関係を含むもので、単純に「面白のけしきや。」のような形を考えることはできない。

以上のように、感動の表現のうちの、

秋萩をしがらみふせてなくしかの目には見えずて音のさやけさ。

うつゝにはさもこそあらめ、夢にさへ人目をもるとみるがわびしさ。

神ならぬ身のかなしさよ。

は、〈S' - P〉 関係を含む面のあるものとして、他の例と別格に置かなければならない。

次に、希望の表現について。『日本文法學概論』は、「あはれしりたる人もがな。」「老いず死なずの薬もが。」など、体言を受ける形のもを掲げた。「～が欲しい」「～があったらなあ」の意のものである。

しかしながら、「モガ」「モガモ」「モガナ」には、体言を受けるもののほかに、

たまきはる 命に向かひ 恋ひむゆは 君がみ船の 梶柄にもが (梶柄母我)

[万葉集八・1455]

あしひきの 山は無くもが (奈久毛我) 月見れば 同じき里を 心隔てつ

[万葉集十八・4076]

月日おき 逢ひてしあれば 別れまく 惜しかる君は 明日さへもがも (明日副裳欲得)

[万葉集十・2066]

天地と ともにもがも (登毛尔母我毛等) 思ひつつ ありけむものを …

[万葉集十五・3691]

まことにて 名に聞く所 羽ならば 翔ぶが如くに 都へもがな

[土佐日記]

世の中に 避らぬ別れの 無くもがな 千世もと祈る 人の子のため

[伊勢物語]

のように、〈名詞+助詞〉を受けるものや、形容詞・形容動詞の連用形を受ける形のものもある。「～でありたい」「～であってほしい」の意である。

もの・ことを欲することと、その状態が実現することを希望することとは、意味の上で一続きのものである。

述体と喚体とは、句が主述から成るものであるか体言を骨子とするものであるか、という観点から二分されたものであった。ただ、上に述べてきたように、述体と喚体とは、連続する部分がある。その点について、以下に検討する。

2-2 「きれいな花なこと！」という表現について

「面白のけしきや。」「情けなの人や。」に類するものに、

心憂のことや、翁丸なり。〔枕草子〕

がある。この例の「こと」が、「面白のけしきや。」の「けしき」や「情けなの人や。」の「人」と同じ資格に立つもの（体言）であることは明らかである。

いとをかしきことかな。〔土左日記〕

のように、終助詞「カナ」の付くものもある。

許さぬ迎へまうで来て、とりいて（＊「取り出で」あるいは「とりゐて——取り率て」）
まかりぬれば、くちお（を）しく悲しき事。

〔竹取物語〕

では、「コト」が「ヤ」や「カナ」を含んで、終助詞の性格も有している。これは、現代語の、「まあ、いいこと！」「芝生に立ち入らないこと！」などの「コト」につながるものであるが、現代語ではほとんど終助詞と化している。

ところで、現代語の、「（まあ、）きれい！」は『日本文法學概論』の分類によれば、述体である。「きれいな花！」は喚体である。それでは、形式名詞「コト」でくくられた

きれいな花なこと！

（近年は、「きれいな花だこと！」のように、「ダ」の連体形「ナ」ではなく、終止形の「ダ」が用いられることが多い。

「きれいな花やこと！」「きれいな花ぢゃこと！」のように、「ヤ」「ヂャ」を用いる地域もある。）

は、喚体なのか述体なのか。

また、

何と、きれいな！

という言い方もある。「きれいな」は、「きれいだ」の連体形で、「何と、きれいなことよ！（何と、きれいなことか！）」の意味である。これなどは、用言の連体形のうちに、「コト（ヨ）」を含めてさえいる。

ここに、「何と～であることよ（か）」と解釈したが、これは現代語の感嘆文の形である。ただし、一般に用いられるよりは、翻訳の文型である。

「きれいな花なこと！」は、「きれいな花だ」を形式名詞「コト」でくくって、全体を体言化しているのであるから、喚体と言ってよいのではないか。これを古典語に翻訳するならば、「うるはしの花や。」に相当する。

「心憂のことや。」「悲しき事。」の「コト」は、なお、実質を伴った名詞であるが、「寂しいことぢゃ。」「うれしいことよ。」のような形を通過して「～デアルコトヨ」の表現ができあが

っていったのである。

この「コト」は、述体の和歌の詠嘆表現、

天離る 鄙の長道ゆ 恋ひ来れば 明石の門より 大和島見ゆ

[万葉集三・255]

を現代語訳する際の、「(～デアル)コトヨ」の「コト(ヨ)」と同じものである。

形式名詞も用言の連体形も、句を体言化する働きをもつ。述体の句をも体言化し、それを「コトヨ」と詠嘆するということは、とりもなおさず、句の全体が一語的なものに還元されるということである。

<1-6>に、

<S-P>を「コト」で包んで、<S-P>全体を体言化し、「～ヨ」と詠嘆する。この時、「<S-P>コト」は名詞句となって、

松浦川 玉島の浦に 若鮎釣る 妹らを見らむ 人のともしさ

[万葉集五・863]

の場合の、名詞「トモシサ」と同じ資格となる。

と述べた所以である。

また、<2-1>に掲げた希望の表現のうち、「モガ」「モガモ」「モガナ」が<名詞+助詞>や、形容詞・形容動詞の連用形を受ける形の、「梶柄にもが」「山は無くもが」「明日さへもがも」「天地とともにもがも」「都へもがな」「無くもがな」なども、「梶柄であること — が欲しい」「山が無いこと — が欲しい」「明日(今晚)もくること — が欲しい」「天地とともに長く久しくあること — が欲しい」「都へ到着すること — が欲しい」「無いこと — が欲しい」という構造を見いだすことができ、これも、「モガ」「モガモ」「モガナ」が体言を受けるものと同じ資格である。

2-3 日常会話と土地賞めの和歌

山田孝雄は、英文典の、

叙述文(説明文)・疑問文・命令文・詠嘆文(感動文)

に分けるものや、ヴントの

叙述句・叫喚句・疑問句

に分けるものなどを検討して、

ヴントの言は歐洲諸國の語には共通の眞理といふことを得べきかも知らねど、世界共通の絶對的眞理といふべからざるなり。

[日本文法學概論、P. 929]

と考え、

わが國語の句に於いては根本的に差別ある二種の發表形式の存することを認めざるべからずと信ず。

[同、p.935]

と結論づけて、喚体・述体の別を立てるに至ったのであった。ただし、西欧の言葉においても、“Beautiful flower!” という表現はある。

また、『日本文法學概論』は、

一の體言を骨子として、それを呼格とし、それを思想の中心點として構成せらるゝものなり。これはその直感的一元性の發表形式をとることに於いて、述體の句の理性的二元性の發表たるものと性質と構造との二面に於いて根本的に違ふものとして對立するものなり。

[同、p.936]

一の句とは統覺作用の一回の活動によりて組織せられたる思想の言語上の發表をいふ。

[同、p.917]

之を以て句の完備不完備を鑑別すべき要件は一の思想をその言語に寓して同じ社會の人がこれに對して一定の思想を必然的に喚起するか否かといふ一點に歸すべきものなり。

[同、p.923]

と規定し、「犬」「火事」「水」「菓子々々」(同、p.912～p.913)の類を、「不完備なる句」(同、p.919)とした。

「犬」「火事」「水」「菓子々々」などの表現は、日常の会話の中では、しばしば表われるものである。言語の話される場面において、話し手と聞き手との間に了解が成り立つものであるならば、それで十分に統覺作用は働いている。実際の言語の話される場面や文脈の中では、相互関係によって言葉が補われることが、むしろ日常的なことである。極端な場合、

— 太郎、たたいた。

— が？ を？ (「太郎がたたいたのか、太郎をたたいたのか。」の意)

— が。 (「太郎がたたいたのだ。」の意)

のような会話もある。

統覺と言ひ完備不完備と言ふものは、話し言葉と書き言葉とではおのずと異なる。話し言葉には、言語の話される場面の状況というものがあるが、書き言葉ではそれが伝わらない場合がある。万葉集に、

あさもよし 紀人ともしも 真土山 行き来と見らむ 紀人ともしも

[万葉集一・55]

のような、土地賞めの歌がある。土地賞めの歌は、臨場性にゆだねられた表現であるため、歌の歌われる場に同席しない現代の人は、感動を共有することが難しい歌の一つである。そこに同席していた人々も、同じ感懐をもったとは言い切れない。したがって、この歌は、不完備の歌ということができる。ところが、『日本文法學概論』においては、このような句は述体に属することになるのであって、「花かな。」「月かな。」(同、p.937)の類の不完備な句の分類には入らないのである。

言語の話される場面や文脈の中で統覚作用が働くことと、一文が完備したものであるか不完備なものであるかは、一致するものではない。また、述体の句であるならば完備しているわけでもない。

3 主述文と非主述文

歌は、叫びから発生したという説がある。

歌には、叙事詩と抒情詩とがあり、抒情詩は、心を歌うものである。叙事詩は散文性をもつが、共同体の英雄を讃える気持ちなどから発したものであるから、〈讃える〉という感情を含んでいる。喜びを、悲しみを歌うのが歌であるから、歌の本質は〈叫び〉である、ということと言える(起源ではなく)。

和歌の長歌には、多くの言葉を費やし、複雑な文が展開されているものがある。それでも、和歌の長歌は、題詞に要約することも可能なものである。寿歌ならば寿ぐことを、挽歌であれば魂を鎮めることを意図して、喜びの、また、悲しみの感動を伝え、人々を感動の渦に巻き込む働きをすれば事足りる。それは、「めでたい!」「悲しい!」という一語文性を出せるものではない。このように、和歌とは、多くの語を費やしたところで、たった一語に還元できる、一語文に等しいものなのである。

なればこそ、

天離る 鄙の長道ゆ 恋ひ来れば 明石の門より 大和島見ゆ
を現代語訳する際に、「コトヨ」という詠嘆の言葉が加えられるのである。

「花!」は、『日本文法學概論』に言う【喚体】である場合もある。しかし、【喚体】は、注意を喚起する場合や詠嘆の場合に限られ、「花。」や、「花。」の強調表現の「花!」、「おいしい?」「おいしい。」を含まない。また、山田孝雄の【喚体】という術語は、名詞の用法についての術語である。述体であっても、「コトヨ」の詠嘆を込めた、一語から成る文に等価の、和歌などの創作表現や、「翔ぶが如くに都へもがな」のような、「モガ」「モガモ」「モガナ」が〈名詞+助詞〉や、形容詞・形容動詞の連用形を受ける形の希望の表現を含まない。

山田孝雄は、

- ・具体的な話し言葉や書き言葉を例に取り、取り出した一文を、言語の話される場面や文脈から切り離し、独立したものとして扱う。
- ・例文を、(話し言葉であるものも) 書き言葉として扱う。
- ・主語述語を備えているものを「理性的二元性の発表たるもの」と考える。

という立場に立っていた。

そこから導き出された述体・喚体の概念に、言語の話される場面や文脈の要素を加え、また、一語から成る文に等価な和歌などの創作表現や「翔ぶが如くに 都へもがな」のような希望表現なども考慮した結果、主述を含んだ文を主述文と名付け、主述関係を含まない文を非主述文と名付ける。

この場合、

— 太郎、たたいた。

— が? を?

— が。

の「が? を?」や「が。」も、一応、主述文の中に入る。

〔注〕

- (1) ただし、言い間違いなどの要素は省く。言い間違いはどのような要因で起こるか、ということの研究する分野もあるが、言語心理学などの領域の研究である。
- (2) 『日本文法學概論』では
…一面に於いてそれら副詞、助詞はこの種の句の組織には絶待の必要條件にあらずといふことの認めらるゝが、一面に於いてこの種の句は
連體格 — 中心骨子たる體言
といふ形式を以て構成せられたるものなることは明かなり。 [日本文法學概論、p.945]
と述べて、詠嘆の助詞を省いた形で、喚体の説明している。

本文中の引用については、

万葉集 (塙書房『万葉集』本文篇)

竹取物語 (岩波書店 日本古典文学大系9『竹取物語 伊勢物語 大和物語』p.65)

伊勢物語 (岩波書店 日本古典文学大系9『竹取物語 伊勢物語 大和物語』p.162)

土佐日記 (岩波書店 日本古典文学大系20『土佐日記 かげろふ日記 和泉式部日記 更級日記』p.33~p.34, p.37)

枕草子 (岩波書店 日本古典文学大系19『枕草子 紫式部日記』p.53)

に拠った。ただし、万葉仮名の訓み、および、平仮名書きのものについては、適宜、漢字を充てた。

(たなか みどり 日本語日本文学科)

2001年10月17日受理

